

「体罰」は日本社会では指導～教育の一環ではなかったのか

映画評論家の佐藤忠男は『草の根の軍国主義』のなかで、日本軍がアジアへ進出したとき、オランダの植民地から解放してくれると歓呼で迎えたインドネシア人を、日本兵は日本軍の司令部の前で敬礼しなかったという理由ですぐ拳骨で殴ったために、彼らの解放への期待は幻滅に変わったという話に関連して、《日本では輝ける知的エリート集団として伝説的に語り伝えられている旧制の第一高等学校の寮の伝統に〈鉄拳制裁〉なるものがあつたそうで、学校の名誉を汚した者の頭を殴ることが〈愛の鞭〉であると知的エリートも思い、民衆もこれに毒されていた。それが日本兵対アジアの民衆というレベルでは耐え難い人格的侮辱と受け止められ、日本人のレベルの低さを示すものと見られていた》と記しているが、いうまでもなく高校や大学の体育会系クラブの「恒例の行事」なるものは、旧制の第一高等学校の〈鉄拳制裁〉に連なる伝統であろう。

力士暴行死事件や海自隊員死亡事件もまた、「恒例の行事」や伝統の産物にはかならなかった。「恒例の行事」と言われれば、集団に属している以上どうしても従わざるをえないし、「伝統」ということになれば、個人の判断を超えるから、思考停止に全員が陥らざるをえない。前号で「恒例の行事」であれ「伝統」であれ、事故（事件）が発生して公然化されたとき、関係者の誰もが平謝りすることの不思議さを挙げたが、本当は別に不思議でもなんでもないのである。なぜなら、「恒例の行事」も「伝統」も単なる集団内部の約束ごとであって、集団を超える社会で通用する「行事」でも「伝統」でもないことを知り抜いているからだ。つまり、自分たちの集団内の「行事」や「伝統」は社会に釈明するどんな言葉ももたないことを知っている。いや、よく考えれば、事件になってはじめて社会に対してだけではなく、集団内の自分たちにも納得できる言葉をもっていないことに気づくのである。

本当に不思議なのは、「恒例の行事」も「伝統」も、社会にとってはもちろんのこと、集団内の自分たちにも、なぜこんなバカげた習慣があるのかわからない、ということであろう。だが「恒例の行事」にしても「伝統」にしても、集団内の誰もが理解できないからこそ行事や伝統たりえているし、誰もが理解できない次元に超出しているのが行事であり、伝統であるといえなくはない。前号の毎日の落合記者は、伝統は「近代の産物」であり、『創られた伝統』（T・ホブズボウム、T・レンジャー編）に従って、こう解説する。

《産業革命が社会を揺さぶった19世紀から20世紀にかけ、主に欧州で伝統がいかに大量生産されたかが、具体的な事例を挙げて紹介されている。スコットランドのタータン文様のキルト、戴冠式をはじめ英王室の儀式、儀礼など。変革期にあつて、支配者が社会の安定を図り、構成員のアイデンティティーを確立し、連帯感を高めるため伝統を構築したと説く。／その西欧から日本は明治以来、さまざまな制度や価値観を導入し、近代国家の身繕いを整えた歴史を持つ。》

この解説で重要なのは、《変革期にあつて、支配者が社会の安定を図り、構成員のアイデンティティーを確立し、連帯感を高めるため伝統を構築した》という視点であろう。「伝統」が思考停止状態における連帯感を高めるための装置として構築されているのが、明らかにされているからだ。ラグビー部で酒を飲んで走ることが繰り返されるのは、誰が考えても理屈に合わない、バカげた行為であるが、そんな「恒例の行事」だからこそ、《構成員のアイデンティティーを確立し、連帯感を高める》のに大いに役立っている、という考えがそこには貫かれている。誰でもが納得できる合理的判断に基づいて、《アイデンティティーを確立し、連帯感を高める》のではなく、合理性を超えた非合理的感情によって、《アイデンティティーを確立し、連帯感を高め》ようとするのであり、理屈を超える信じ合うことに基づく結束の強さにこそ、価値観を置こうとしているのだ。

「理屈を超えた信頼」に比重が置かれれば、理屈から大きく掛け離れていけばいくほど、そこでの一体感もより大きくなるという発想がそこに生まれてくる。つまり、非合理的感情を共有し合うことによる結束の強さである。だからこそ、繰り返し酒を飲んで走る、というなんの意味もない、バカげた、無茶な行為が「恒例の行事」とか「伝統」とみなされて、存続されることになる。もちろん、そこには「成長物語」が強固に控えている。そんな無茶に思える行為を乗り越える（本当は単に従って

いるだけだが) ことによって、集団の立派な一員となって成長していくという物語である。一種の「通過儀礼」でもあった。「成長物語」でもあり、「通過儀礼」でもあったからこそ、上級生は下級生にむかって迷うことなく、バカげた習慣を命じることができた。「成長物語」であれば、跳び越えなくてはならないハードルは高いほどよかった。ハードルの高さはもちろん、無茶の度合いで測られる。

力士暴行死事件にしても、海自隊員死亡事件にしても、集団の外からみれば、紛れもなく凄惨な「集団暴行」にほかならなかったとしても、集団内部では「成長物語」の神話が信じられていたが故に、「鍛え直して一人前にする」荒行としての意味をもっていたのだ。力士暴行死事件についていえば、宿舎を逃げ出すなどして脱落した若手力士を立ち直らせるためには、生半可な処置では埒が明かない。鍛え直すほうも鍛え直されるほうも、「死ぬ気」で臨まなくては、元の本阿弥になってしまう。したがって、「死ぬ気」で立ち直らせるつもりで鍛え直していた筈であったが、度を越して本当に死なせてしまうことになった。そのようにみえるかもしれないが、そうではない。そこで考えなくてはならないのは、鍛え直すことと制裁の関係であろう。要するに、鍛え直すことよりも制裁の度合いのほうが大きくなかったかどうか、という問題である。

おそらく親方や兄弟子の気持には、鍛え直すという思いと制裁の感情とが分かち難く混在していた筈だ。「成長物語」からすれば、不肖の弟子であればあるほど、一人前に鍛え直してやろうという思いが募っていたにちがいない。一方、他の若手力士の手前、示しをつけなくてはならないということからすれば、どうしても制裁的な要素が強くならざるをえない。いうまでもなく制裁は制裁であって、鍛え直すこととは全く異なる。「鍛え直す」ことはいかに過酷な鍛錬を課していても、そこには「生還させる」ことがはっきりと見据えられていなければならない。つまり、鍛錬が身について還ってこなければならない。しかし、制裁は制裁する側の感情に左右されており、制裁される側の感情は視野に入っていなかったから、「生還させる」ことは考えずに行きつくところまで行くほかなくなる。

「鍛え直す」ことと制裁の違いは、鍛錬と暴行の違いであった。鍛錬が「生還させる」ことを前提とするとき、それは身体と共に精神も「生還させる」ことが見据えられていたから、暴行の要素は皆無か、できるかぎり小さかった。なにより鍛錬で命を失うことはない。ビール瓶で額を打ち付けたり、全身を木製の棒で殴ったり、けいこ場の柱に縛りつけて顔や腹を殴打することは、どう考えても鍛錬ではなく制裁であり、集団リンチであった。「鍛え直す」ことの要素は皆無であった。「制裁目的と推認でき、正常なけいこの範囲を逸脱した違法な暴行」という判決は、大相撲という格闘技の世界で、「鍛え直す」ことを名目にした集団リンチと認定していたのであり、親方も兄弟子も「生還させる」鍛錬を見失ったとき、単なるリンチ殺人を犯しただけのことであった。

だが海自隊員死亡事件の理解しがたさは、力士暴行死事件の比ではなかった。海自隊員死亡事件では訓練中の出来事ではなく、特殊部隊を辞める隊員に対する最後の15人相手の徒手格闘訓練中の出来事であったからだ。つまり、「成長物語」とも無縁であった。《去る仲間を危険な格闘で「送別」する必要性がどこにあったのか》という素朴な疑問が、誰の心中にも去来して止まない。こんな事例は考えられないが、ちょうど力士暴行死事件でいえば、力士を辞めて廃業するのが決まっている者に対する集団暴行のような事例に相当していた。いいかえると、15人相手の徒手格闘訓練そのことの無意味さではなく、そのような「恒例の行事」や「伝統」そのものの無意味さなのである。集団に属する者に課せられる「恒例の行事」や「伝統」である筈なのに、集団に属さなくなる者に対する「恒例の行事」や「伝統」の奇妙さは、それらの無意味ないかがわしさを大きく浮き彫りにしていたのだ。

大学のラグビー部で、繰り返し酒を飲んで走るというバカげた行為が「恒例の行事」とか「伝統」とみなされているのは、《構成員のアイデンティティを確立し、連帯感を高めるため》の装置であったからだ。前述したように、その「恒例の行事」が無茶なものであればあるほど、その無茶を通して一体感がより一層深まると考えられていた。なぜなら、一体感は頭ではなく、理屈を超えた無茶なことを体を張って一緒にやるなかで生まれてくるという固定観念に囚われていたからである。したがって、そこでは論理的な思考や合理的な判断、筋道の通った疑問などから、いかに逸脱するかがめざされていた。その逸脱はバカバカしさ、無意味さに集中していった。しかし、いくらバカげた、無意味な内容の「恒例の行事」や「伝統」であろうとも、それらが集団内部の構成員の《連帯感を高める》方向になれば、成り立ちえないことも確かであった。